

平成州紙



おりおりの記

## 素朴な疑問

一般社団法人 投資信託協会  
副会長専務理事

大久保 良夫

米国の大学の講義でのことである。白人、黒人、アジア人。多様な学生達が真剣な顔で身を乗り出して聴講している。教授が説明を終えて、「何か質問は？」と聞くと、ある留学生が手を挙げて質問した。その質問を聞いて、一緒に受講していた他の学生たちから一瞬驚きの声が上がリ、やがて笑いが漏れた。その質問があまりに初歩的で、授業を理解していない愚問と思われたからだ。教室がざわめいた。質問した学生も当惑している。

教授は真剣な顔をして、しばらく黙って考えていたが、やがて静かにその学生の質問を丁寧に繰り返した。そして、その質問にぴったりと沿って論理を組み立てて、あたかも講義を初めからやり直すかのように説明を進めた。教室が一斉に静かになる。愚問と思われた質問が、実は深い意味を持っている、と皆が気づいた瞬間だった。教授の新たな論理展開に、すべての学生が新鮮な驚きを感じている。留学生への嘲笑は畏敬に変わった。

誰の質問にも丁寧に答えていく態度。質問の背景にある質問者の考えを把握しようとする姿勢。小さな疑問の中にある本質的な意味の探究。40年ほど前のもので、どのような講義内容だったか、どのような質問であったか、すっかり忘れてしまったのだが、私は今でもその教授の誠実な人柄と講義風景を鮮やかに思い出す。

素朴な疑問に分かり易く応えるのは難しい。疑

問の本質を良く分かっている人だけが出来ることだ。

現代人は細分化された専門の世界に生きている。専門世界のなかの競争が、

新しい知の領域を拓き、人間社会に進歩をもたらす。一方、専門世界は独自の専門用語を作り出し、知らないうちに部外者に分かりにくい世界を作っていく。しかし、専門分野は専門家のためではなく、人間や社会のためにある。専門外の人からの素朴な疑問を受け止め、それに的確に応え、説得することが出来なければ、専門家に対する尊敬は失われ、専門分野の存在意義も疑われるようになりかねない。

「専門家はもうたくさんだ！」

今、そういう声の世界に満ちているような気がする。世の中が複雑になる一方で単純な答を求める風潮が高まっていることが原因だろうが、専門家が素朴な疑問を軽視していることも一因なのだろうか。あの教授の講義風景を思い出して、そんなことを考えている。

